

『類題青藍集』から見る勤王の志士秋元安民の繋がり

板東優実

秋元安民（1823-1862）は幕末に生きた姫路藩士である。国学者の大国隆正や伴信友に師事し、自らも国学者となった。姫路藩校好古堂の教授として国学を教え、姫路藩の勤王派の醸成に関わっている。また、秋元安民は勤王の志士であり、藩主酒井氏が京都警衛に任ぜられた際は自ら京都へ赴き、姫路藩勤王の主唱者として他藩の志士と交わっていた。

秋元についての先行研究は主に伝記研究であり、文学資料を中心に据えた研究はない。秋元が編纂した類題和歌集に『類題青藍集』がある。『類題青藍集』は安政6年(1859年)に刊行され、591名の和歌が2886首収録されている。これについての研究はそれら伝記研究の中で部分的に触れられるのみとなっている。そこで本研究では、秋元安民が編纂した『類題青藍集』の巻末に附属されている「姓名録索引」を用いて『類題青藍集』に和歌が掲載された人物に注目し、彼らについて調査することによって、秋元安民が和歌の活動を通して持っていた繋がりを明らかにすることを研究目的とする。

本研究では、まず「姓名録索引」に記載されている「所属」を用いて『類題青藍集』に取り上げられた人物の地域性を調べた。また、同じく「姓名録索引」の「名」「姓名あるいは通称」を用いて人名事典及びインターネットを用いて調査を行った。

その結果、現在の都道府県に置き換えると47都道府県中38都道府県から人物が選出されていることが分かった。また、各人物について、人名事典では167名、インターネットでは59名、計226名について記述が確認できた。

以上の調査から分析した結果、秋元は和歌の活動を通して西日本地域を主としながらも全国的な繋がりを持っていることが分かった。

また、記述が確認できた人物について、身分を見ていくと西日本地域の藩士と神職の者が多かった。藩士が所属する藩について調査した結果、秋元は、藩の意向が倒幕派か否かという基準で交流を行っていないことが推察できた。神職の者が属する神社の割合として皇室に関連する神を祀っている神社が17社中7社であり、人数としては29名中17名であったことから皇室を重んじる傾向にある神社と多く繋がりがあったと推測できた。また、勤王活動に関わりのある人物が26名であったことから勤王活動の有無によって人選が行われていないことが推測できた。さらに、記述があった226名のうち180名が国学と繋がりがあった。『類題青藍集』は国学と繋がりがあった人物から多く和歌を集めていたと推察できた。

以上のことから『類題青藍集』は秋元安民の人脈を知る上で貴重な資料であることが明らかになった。今後の課題として秋元安民と歌集収録歌人が具体的にどのような交流があったかを明らかにすることが挙げられる。

(指導教員 綿抜豊昭)